

シリーズ「放課後子ども教室推進事業」
(初中教育ニュース (初等中等教育局メールマガジン掲載))

【第8回】

ドラマを生み出す『放課後子ども教室 あさひちゃれんじきつず』
三重県明和町立上御糸小学校長 広瀬 郁子

「お兄ちゃん、これうまいこと切れやんわ。」

「どれどれ。ちょっとお兄ちゃんが切ってやるから、よう見とんなあい。」

『放課後子ども教室』(以下『教室』)のペン立てづくり(木工)作業の中で、上級生と下級生の間で交わされた言葉である。

その後、下級生は上級生の様子を真剣な眼差しで見つめ、

「分かった。ぼくやってみるで見とって。」「そうそう、うまいぞ。」

なんともほほ笑ましい光景である。

また、指導員さんと子どもとの間で、こんな会話も交わされた。

「おじちゃんは、君のお父さんを小さい頃からよく知ってるよ。」

「うそー。お父ちゃんはどんな子どもやったん。」

「ものすごく元気な子やったよ。」「へー。」

また、ある母親から

「今度の『教室』は、いつあるのですか？」という問い。理由は、子どもが歯医者に通っているが、『教室』を楽しみにしているので、その日は予約を入れないようにするためとのことであった。

『教室』には、さまざまなドラマがある。このドラマを生み出す『教室』は、本校にしっかり根付いたといえる。

『教室』が開催されるたびに、本校の子ども(222名)のほぼ1/4の子が参加するようになった。まさに、この『教室』は学校生活の一部になったと言っても過言ではない。『教室』が定着するにつれ、保護者の方々の参加が多くなってきたことも嬉しい限りである。また、この『教室』が学校生活における異学年の交流を深める一助となっていることにも感謝したい。

(初中教育ニュース (初等中等教育局メールマガジン) 第100号に掲載)